

学 位 論 文 要 旨

研究題目

未治療期間が強迫症 (OCD) の臨床像や精神病理、治療反応性に及ぼす影響についての後方視的調査

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻

高次神経制御系

神経精神医学 (指導教授 松永 寿人)

氏 名 日下部 新

強迫症 (obsessive-compulsive disorder) では、選択的セロトニン再取り込み阻害薬 (SSRI) および認知行動療法 (CBT) が第一選択的治療とされている。現在のところ、両者の併用が最も有効で標準的と考えられるが、この反応性にどのような要因が影響するのかについて、いまだ一貫した見解は得られていない。最近では、経過中における強迫行為の特性の変化、すなわち不安を中和するという能動的で目的志向的なものから、不安に関わらない習慣的行動化することが注目されており、その背景にある生物学的メカニズムの変移が推定されている。本論文では、発症後から薬物など適切な治療開始までの罹病期間、すなわち未治療期間 (duration of untreated illness; DUI) に注目し、OCD の臨床像や精神病理、あるいは治療予後にいかに影響するかを、後方視的調査によって検討した。対象は、兵庫医科大学病院精神科神経科もしくは大阪市立大学医学部付属病院神経精神科を初診となり DSM-IV-TR の診断基準を満たした OCD 患者 358 例とした。この内、当科初診以前に適切な SSRI あるいは CBT の使用など、APA の治療ガイドラインに則った治療を 6 か月以上継続した経験を有していた 78 例を除外した。残りの 280 例について、発症から当科初診までが 5 年以内のものを S 群 (134 例)、10 年以上のものを L 群 (92 例) とし、比較や解析の対象とした。初診時、L 群は S 群に比し有意に高齢で、機能の全体的評定尺度 (GAFS) 得点は有意に低値であったが、男女比や教育年数は同程度であった。Y-BOCS で評価した OCD の重症度は、強迫観念得点に有意な群間差を認めなかったが、総得点および強迫行為得点は、L 群が有意に高値であった。強迫症状の内容は、L 群において、性的・宗教的なものが高率の傾向で、洞察不良の頻度やうつ病の併存率などには差を認めなかった。さらに一年間標準的治療を継続したもので改善率を比較したところ、S 群が有意に高度であった。結果として DUI が長期のものは、より強迫症状が重度で全般的機能水準が低度であり、治療開始一年後の予後も有意に不良であった。これは DUI が、OCD の病像や治療反応性に有意に影響することを示しており、長期化による機能的問題に加え、背景にある生物学的メカニズムの時間的変遷を反映している可能性が考えられた。この結果は OCD における早期発見、早期介入の重要性を支持するものと考えた。